



# 新年ご挨拶

## ～鶴学園創立50周年を迎えて～

学校法人鶴学園  
理事長 鶴 衛

新年、明けましておめでとうございます。

皆様、よい新年をお迎えになったことと存じます。

さて、昨年いろいろな出来事がありました。教育関係者にとってショックだったのは、年末に発生した小学生の殺害事件です。“いたいけな”と呼ぶほかない少女が、相次いで憎むべき残虐な犯罪の犠牲になり、その影響で街角や公園などで遊ぶ子供たちの姿が少なくなりました。また、学校が終わってからの家路の途中における道草の楽しみや放課後の語り、友達とのささやかな冒険は、大人たちの懐かしい思い出だけになりつつあります。いつの時代も大人の心を癒してくれるのは、子供たちの生き生きとした笑顔と明るい笑い声です。それらが街角から消えてしまうのは、誠に残念です。今年、日本社会に伸び伸びと遊ぶ子供たちの姿が戻ってくることを祈っています。

今年、本学園にとりまして特に貴重な年となります。学園創立者(現名誉総長)鶴 襄が、広島市西蟹屋町に創設した各種学校「広島高等電波学校」の設置認可を得たのが昭和31年2月23日です。それから数えて、ちょうど50年目を迎えます。50年の間に小学校から大学・大学院まで、7校を擁する総合学園として発展してこられたのは、

教育のためにと大切な土地を提供していただいた地元の皆様をはじめ、官公庁、地域の様々な企業、元気に通学してくれた学生・生徒たちとその保護者の皆様、そして教職員のお陰と感謝しております。

ここで、この50年間を簡単に振り返ってみたいと思います。まず、各種学校の広島高等電波学校では、中学校を卒業して入学した生徒について高等学校卒業資格を取得させることができず、就職も厳しいという問題がありました。そこで名誉総長は、高等学校創設に向かって準備を進め、広島市西区井口町に校地を取得し、昭和32年11月27日に「学校法人鶴学園」の設置認可を受け、昭和33年4月、「広島電波工業高等学校」を開校しました。この学校は、「広島工業大学附属工業高等学校」という名称を経て、現在の「広島工業大学高等学校」となっています。

歴史の浅い私学が生き残るためには、他より抜きん出た優れた条件が必要であると考えた名誉総長は、父であり教育者として尊敬していた鶴虎太郎の遺志であった工業短期大学の設立を決心し、昭和36年4月1日に佐伯区三宅に「広島工業短期大学」を開校しました。この時に名誉総長はさらに先を見ており、高度経済成長を続ける日本においては、4年制の工業大学が必要になると考え、直ちに「広島工業大学」

の設置認可申請に取り掛かりました。そして昭和38年4月1日に工学部電子工学科、電気工学科からなる広島工業大学が誕生したのです。翌年には機械工学科を、続いて昭和40年には土木工学科と建築学科を、さらに経営工学科を昭和41年に増設しました。

この時代の本学園の中等教育では、昭和36年に「広島工業短期大学附属中学校」を、そして昭和40年には「広島高等学校」を開校しました。この両校は、昭和41年にそれぞれ「広島工業大学附属広島高等学校」、「広島工業大学附属中学校」と改称され、現在の社会でニーズの高まっている中高一貫教育がスタートしたのです。

この草創期を経た後に、昭和59年には社会に求められる情報技術者育成のための専門学校として、「広島工業大学附属広島情報専門学校」を開校し、平成6年に「広島工業大学専門学校」と校名変更をしました。

平成12年には、広域通信制・単位制の「デネブ高等学校」を中区中島町に開校しました。不登校や中途退学者が増加している現状を憂慮し、生徒たちのために必要な教育の場を提供したいという理想に向けての開校でありました。

また、平成15年には、鶴学園における小・中・高12年一貫教育を実現するための学校として、「なぎさ公園小学校」

を開校しました。この一貫教育では、学習環境を整え、成長過程に応じた私学ならではのスタイルで、ほんものの知性とほんもの人間性を兼ね備えた21世紀人を育てていきたいと思っています。

広島工業大学では、その後、急速に発展する科学技術への対応として大学院を設置するとともに、21世紀最大の問題である環境問題へ取り組むために環境学部を創設しました。さらに、技術の進化や情報の高度化を背景とした社会のニーズに応えるために、工学部を一度再編成した後、社会と環境への思いやりと高い技術者倫理を持った人材を育成するために、今年から「教育改革18」をスタートします。そして新しい教育を実現するために学部学科の改組再編を行い、工学部・環境学部の2学部8学科体制から、新たに情報学部を加えた3学部12学科体制へ移行します。

そして、創立50周年を迎え、教育環境の整備にも努めて行く所存です。まず、2007年3月の卒業式に間に合うように、広島工業大学高等学校に新体育館建設の計画を急ピッチで仕上げていきます。

広島工業大学には、講義室を中心とした新校舎を建設する予定です。この新校舎は、最新の設備を整えた多くの講義室だけでなく、学生の憩いの場と

なるスペースも備えた建物にしたいと思っています。2008年3月竣工を目標としており、完成したときには、広島工業大学の新しいシンボルとなることでしょう。

広島工業大学附属広島高等学校・中学校の校舎も新しくする予定です。しかしながら、広島高校・中学校には、増加した生徒数に対応できる広さのグラウンドを確保する必要があるという難しい問題があります。この問題も近いうちに解決できるよう努力しているところです。

このような教育環境の整備だけでなく、創立50周年を新たな出発点として、原点に戻って教育理念を再認識するとともに、教育・研究をさらに充実させ、学園の更なる発展を目指します。しかし21世紀を迎え、少子高齢化社会の到来、情報化の加速度的進行、経済活動のグローバル化など教育を取り巻く環境の変化は厳しいものがあります。さらに最近の日本の教育界では、学力低下問題をはじめ、子どもに関する問題が山積していると言われてい

ます。このような混沌とした時代の中、難しい教育的課題に私立学校はどう取り組むべきでしょうか？この問題に対して私は、建学の精神と教育方針に込められた想いや理念の理解を深め、鶴学園ならではの「オリジナルな教育」

を手作りによって作り上げていく、こういう姿勢がとても大切なことだと考えます。本学園の場合、建学の精神として校祖鶴虎太郎の「教育は愛なり」があります。この「愛」とは、「想い」を持って教育にあたること、つまり「児童・生徒・学生の現実にきちんと向き合い、どういう教育をどのようなプログラムで展開すべきか」、「それが児童・生徒・学生の何を養うことになるのか」、そして「それがどのような人材育成につながるのか」という「想い」を常に持って教育にあたることです。さらに名誉総長鶴 襄の教育方針『常に神と共に歩み社会に奉仕する』という言葉の中には、「想い」を込めた自己活動を教員が絶えず「これでいいのか」、「さらに工夫できることはないのか」と自己点検する“自律の精神”が含まれています。

私学らしい私学教育、つまり個性あふれる教育を作り出すには、何よりも「想いを込めて」、「愛の精神で」、与えられたものを「ただこなす」のではなく、「教育を手作りする」という活動を常日頃から繰り返すことが必要となります。この点を心にとめ、本学園教職員全員の力を合わせて、鶴学園独自の教育を作って行く所存ですので、皆様におかれましては、今後とも益々のご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。